

論文 / 著書情報
Article / Book Information

論題	中米移民キャラバンをめぐる国際政治 - キャラバンの政治的意味とメキシコ政府の対応 -
Title	
著者	渡辺 暁
Authors	Akira Watanabe
出典	FLS言語文化論集 POLYPHONIA, Vol. 14, , pp. 21-56
発行日	2022, 3

中米移民キャラバンをめぐる国際政治

——キャラバンの政治的意味とメキシコ政府の対応——

渡辺 暁*

(WATANABE Akira)

はじめに：中米移民キャラバンと通過国としてのメキシコ

メキシコは移民送出国として知られ、アメリカ合衆国（以下米国）のメキシコ生まれの人口はメキシコの総人口の1割を超えるほどである。しかし2008年のリーマンショック以降、メキシコから米国への移民は減少しており、彼らにかかわって増えてきたのが、中米北部の3国（ホンジュラス・エルサルバドル・グアテマラ）からメキシコを通過して米国に向かう人々である。墨米国境¹⁾での不法移民の拘束のデータを見ると、2014年ごろからこれら3国の出身者がメキシコ出身者を上回るようになった（Cohn et al. 2017）。彼らは墨米国境にたどり着いたあと、密入国という方法で、あるいは故国での暴力の蔓延を理由に難民申請を行って（あるいはその2つの組み合わせで）、米国への入国・定住を目指す場合がほとんどである。

2018年から2019年にかけて、中米からの移民たちは「キャラバン」と呼ばれる集団を作って注目を集めた。本稿はこの移民キャラバンという現象についての、政治学的な視点からの考察である。具体的には2つの点に着目して、キャラバンという現象の政治との関わりを検証していく。まず第1に、キャラバンに参加した人々が、なぜそのような重要な決断を下したのかについて、その政治的な背景や理由を明らかにすることである。キャラバンの参加者に対しては様々な報道や調査が行われている。参加の主たる理由は中米諸国における経済的及び社会的な不安で

あるとされるが、彼らが生活をなげうって北に向かうという重要な決定は、それ自体政治的なものでもあると言える。本稿の第一の目的は、移民という現象の政治性に着目し、彼らの行動や意思決定を理解することである。そして第二の目的は、中米移民に対するメキシコ政府の対応である。メキシコの連邦政府そして自治体の対応を明らかにし、そのロジックを分析することは、メキシコの国内の政府間関係と外交を理解するためのヒントとなるだろう。

本稿は5つの節からなる。第1節では中米キャラバンについての先行研究や報道、そして関連する研究を整理・紹介し、本稿の意義について述べる。第2節ではキャラバンの背景として、中米からの移民そしてキャラバンの成り立ちを扱う。第3節では、2018年10月の移民キャラバンに参加した人々が、どのような理由で米国を目指したのか、その理由を検討し、政治的な側面の重要性を確認する。第4節ではメキシコ政府の中米キャラバンへの対応について、特にキャラバンへの連邦と地方、それぞれのレベルでの政府の対応を分析する。第5節では、キャラバン後の状況も踏まえつつ、キャラバンという現象の政治的な意味を中心に、本稿の議論をまとめる。

1 先行研究の整理

本節では、2018年からの移民キャラバンへの対応についての報道や先行研究、そして中米からの移民に対するメキシコ政府の対応などについての関連する研究を紹介した上で、これらの先行研究に本論文が付け加えるもの、つまり本稿の貢献はなにかを述べる。

(1) 移民キャラバンについての報道と先行研究

2018年の3月と10月に発生した移民キャラバンについては、多くの報道がなされているほか、墨米国境地域に位置する2つの大学が、所属する研究者による報告書をまとめており、またこのキャラバンに帯同した研究者によるレポート・論文も発表されている。

移民キャラバンについての報道としては、メキシコのメディアにももちろん注目されたが、米国のメディアとしては、ニューヨーク・タイムズやワシントン・ポストといった伝統的な新聞メディアにくわえて、例えば Buzzfeed などの新興のネットメディアが、キャラバンに密着した報道を行った (Flores 2018)。またイギリスの BBC やガーディアン、そしてドイチュベレ (DW) やロシアタイムズ (RT) など、キャラバンを追ったドキュメンタリー映像を YouTube に公開しており、これらの資料はキャラバンの参加者たちの声をよく伝えてくれる格好の一次資料となっている²⁾。なお、キャラバンの参加者たちが連絡を取り合うのに使った SNS も重要な一次資料として、今後分析する対象となりうることを指摘しておきたい。

学術的な研究としてはまず、墨米国境に位置する 2 つの研究機関によるレポートを紹介する。メキシコ側では北部国境大学院大学 (El Colegio de la Frontera Norte) が、国境沿いの 2 つの町において、現地にたどりついたキャラバンの参加者に対する調査を行い、またメキシコの連邦および州政府や、自治体など、現地におけるメキシコの公的機関の対応についてまとめている。対象となった 2 つの町とはバハカリフォルニア州のティファナ (カリフォルニア州サンディエゴに隣接) とコアウイラ州のピエドラスネグラス (テキサス州イーグルパスに隣接) である。ティファナには 2018 年の 11 月に 6000 人もの人々が到着し、またピエドラスネグラスにも 2019 年 2 月に 1800 人の中米からの移民が到着した。いずれのレポートも、彼らが国境越えのために (特にピエドラスネグラスの場合) なぜその場所を選び、どのような形でどのような施設に収容され、また公的機関がどのように彼らを扱ったのか、詳述されている (El Colegio de la Frontera del Norte 2018, 2019)。

米国側に目を転じると、墨米関係に関する米国最大の研究拠点といえるカリフォルニア大学サンディエゴ校の米墨研究センターが、序論を除いて 6 本の分析からなる報告集を発行している。執筆者はセンター長のフェルナンデスデカストロをはじめとする著名な学者から同大学で研究

する大学院生まで、様々なバックグラウンドを持つ9人の研究者によってまとめられ、移民の出身地である中米が抱える問題や彼らがメキシコを通過する際に経験する困難、彼らが求める難民申請の法制度とその実際の運用、そして政府や市民社会が彼らにどのように対応しているのか、といった点にも目配りがされている（Center for U.S.-Mexican Studies, UCSD 2019）。

キャラバンについての研究として、もう1つ特筆されるべきは、ミシガン大学の人類学の大学院生、フランク＝ビターレによる一連の著作である。彼女は2011年の最初の「キャラバン」に参加したほか、2018年のキャラバンにも参加し、メキシコ南部のチアパス州でメキシコの警官隊と移民キャラバンが一触即発の状況になった時のこと、そして隣のオアハカ州に入り、ある町の町長が食事とバスでの移動、そして自らの靴を提供したことなどを、多様な参加者の横顔と共に NACLA というシンクタンクのサイトに発表している（Frank-Vitale 2018）。またその後、ヌニェス・チャイムとの共著でチアパス自治大学の人文社会系の雑誌に発表した論文では、移動先の炊き出しで出てくる食事が豆ばかりなのに業を煮やして、「ホンジュラス人は豆を食べない」と叫んだ女性のエピソードを例に、このキャラバンという現象の最大の特徴であり強みが、その「過剰なまでの可視性（hypervisibility）」にあると指摘している（Frank-Vitale y Núñez-Chaim 2020）。

移民キャラバンについては他にもいくつかの研究や報告がなされている。キャラバン発生当時、サンディエゴのメキシコ領事館に勤務していたセロリオによる、キャラバンの受け入れのためにサンディエゴの領事館が中心となって、どのように墨米両政府（自治体レベルも含む）の協力体制が取られたか、についての貴重な報告が、西カリフォルニアの国際法の雑誌に発表されている（Celorio 2020）。具体的な取り組みがそれほど詳しく書かれているわけではないものの、そのような連携のための努力があってこそ、「国境が閉鎖されることもなく、すべての正当な亡命希望者がメキシコ国内で待機する間、安全な場所（シェルター）と食事

と衣類を提供され、墨米お互いの行動が、国境の反対側の政府にとって驚きとはならず、また国境の両側に位置するビジネスが、多少の不利益を被ったとしても、商取引に甚大な影響を受けることはなかった」との総括には、現場の声だけに非常に説得力がある (Celorio 2020: 17)。

また、2021 年に出版された『国境と国境の壁』という論文集には、キャラバンに関連する論文が2本収められている (Andréanne Bissonnette and Élisabeth Vallet 2021)。まず、墨米国境における近年の強制送還の増加を分析したシャークの論文 (Shirk 2021) では、中米からの移民の抑止のため、米国からメキシコ政府への様々な圧力がかかっていることが指摘されている (こうした圧力については次項により詳しく述べる)。また国境の安全対策について扱ったウォーカーの論文 (Walker 2021) では、中米移民に対する強硬な取り締まりは、かえって移民たちの危険を高めていることや、トランプ政権が中米諸国への脅しに使った援助の打ち切りの危険性 (援助は一定の成果を上げているとの立場から) を示唆するとともに、実は中米移民については、1 番の問題は (目に見える) キャラバンではなく、「目に見えない人々の移動」なのだ、というトナティウ・ギジェンの言葉を引用し、移民の人々の安全を守ることの難しさを指摘している³⁾。

(2) 中米からの移民とメキシコ政府の役割に関する先行研究

中米移民キャラバンに対するメキシコ政府の対応についても、いくつかの先行研究を紹介しておく。もともとメキシコの先住民反乱の歴史を研究し、墨米国境をまたぐヤキ族の歴史から移民という研究テーマを取り上げるようになった山崎は、メキシコ建国以来の移民受け入れの法制度の歴史を振り返り、中米からの入国をどのように管理してきたのかをまとめている (山崎 2013, 2020)。今回の移民キャラバン以前から、中米各国からはメキシコへの難民申請も行われていたことを指摘し、2013 年から 17 年にかけてのデータをもとに、メキシコも中米からの難民を受け入れていること、そしてメキシコも中米における治安や経済の問題を認

識し、成功したかどうかは別として、様々な形で中米の支援を図ってきたことを指摘している。

メキシコ、特に南部チアパス州においてフィールドワークを行ってきた人口学者の三澤は、雑誌『統計』の移民・難民特集号（2019年1月号）において、主として米国とメキシコの統計資料をもとに、メキシコ・中米の視点から米国の移民政策、特に、米国の移民政策によって、メキシコがどのような役割を担うようになったのか、そして中米諸国がどのような社会的状況にあるのかを論じている（三澤 2019）。結論部分では、メキシコという国は今までのような（米国への）移民送出国であるだけでなく、それに加えて、中米からの移民が米国を目指す際に通過する国、そして、メキシコ自体も移民・難民の受入国となるなど、移民という現象について非常に複雑な立場を持つ国となったことを指摘しているが、これはまさに本稿の問題意識と重なるものである。

メキシコ外交史を得意とする政治学者のロメロは『歴史学研究』に掲載された「メキシコと中米から見た墨米国境問題」と題された論考の中で、メキシコにとって中米は、1824年の中米連邦共和国の誕生以来、援助を通じて接近したり距離をとったりする存在であると論じている（ロメロ 2020）。また彼によれば、現在の中米の北部三角地帯の国々は、「市民にまともに雇用、教育、安全などを提供」することができておらず、またギャングの問題も抱えていて、「中南米において犯罪と暴力がここまで悪化した地域はない。これは中米エリートが貧困問題に目を向けていないからである」と述べている。また、メキシコ政府についても、ペニャニエト大統領（2012-2018）が米国（オバマ政権）の圧力を受けて、南部国境プランを策定して南部国境の警備を強めた結果、米国の非正規移民が減るかわりにメキシコから中米への強制送還が増えたことを指摘し、「メキシコは米国の代わりに「汚い仕事」を行ったと言える。」と総括している（ロメロ 2020: 49-50）。

（3）本論文の意義と構成

本稿の移民研究および政治学への貢献として、筆者自身は次の2点を強調したい。1つは、このキャラバンを政治的な行動として見直すこと、もう1つは、この中米キャラバンの特徴として、移民送出国である中米三国と移民の目的地である米国の間にある、通過される国としてのメキシコという場所における政府と移民の関わりの重要性である。これについては前節で引用した三澤らの研究が既にあるが、本稿は以下の点において、先行研究と異なっている。

政治学が移民を研究対象とするとき、どうしても多くなるのは移民や難民の原因となるマクロ要因や、国家や国際機関による移民や難民の受け入れ条件、あるいは受入国の政策である。しかしこうした研究において、移民や難民の「声」を汲み取った研究は非常に少ない。『国際政治』の「移民・難民をめぐるグローバル・ポリティクス」についての特集号(2018年・第190号)でも、序論で石井が「移民・難民のグローバル・ガバナンスは、ともすれば上からの管理の視点が強調される。しかしそれは誰のための管理だろうか」と問うているように(石井2018: 12)、著者たちも移民の人々の意思を尊重しているはずだが、そこに収められた論文はいずれも、政策の話が議論の中心となっていて、移民の声を引用したものは皆無であった。マクロの記述が中心になるのは仕方ないとはいえ、移民という現象の主役が移民たち自身だとしたら、彼らの声を拾い上げるような研究が必要ではないか。

他方、国際協力の分野でも活動してきた人類学者の木村秀雄は、論文「愚直なエスノグラフィー」の中で、以下のように述べている。

私が「愚直な民族誌(エスノグラフィー)」と名付けたものは、学問的評価よりは現地の人々による転写を通した利用に重点をおき、理論的整合性よりは具体的な観察結果を重視して、現地で目撃したものを多く盛り込み、これまでに蓄積されたものを現地に理解しやすいように整理し、民族誌として提示したものをいう。学問的な価値や論理的整合性よりも、具体的な作業を重視する民族誌という意

味で、これに「愚直な」と言う言葉を冠した。決して悪口ではない（木村 2007: 397）。

本稿はこの木村の姿勢にならい、移民キャラバンの人々の声を、政治学の研究に反映することを目指している。私自身がフィールドワークを行ったわけではないものの、移民キャラバンについては多くの報道がなされていて、そこには多くの移民たちの声が記録されている。本稿ではそれをできるだけ紹介し、議論を組み立てていきたい。

本研究のもう1つの目標は、移民キャラバンという現象に対し、メキシコの移民という現象はさまざまな形でオフィシャルな政治と関わっている。このキャラバンのような現象においては、国境を通過するための入国管理の手続き以外にもさまざまな対応が必要となり、そうした対応は状況に応じて刻々と変化していった。本稿ではメキシコ政府（連邦政府そして地方政府）の対応を中心に、メキシコ政府がどのように中米からの移民キャラバンに対応したのか、あるいはそれが内政や他国の状況にどのように影響されたのかを考察することでも、新たな貢献を目指している。

2 本研究の背景：メキシコ政府の中米移民への対応とキャラバン前史

本節では、本研究の背景として、キャラバン以前のメキシコ政府の中米移民への対応と、キャラバンがどのように発展していったのか、2018年10月の大キャラバンに至る前史をそれぞれ検討する。

(1) 中米からの移民とメキシコ政府

中米から米国を目指す移民は必ずメキシコを通ることになるが、メキシコ政府は彼らにどのように対応してきたのだろうか。

テキサス大学オースティン校のルータートがまとめた「中米移民に対する安全保障問題化の影響」と題されたレポートによれば、現在のメキシコの移民受け入れ政策に影響を及ぼす法律は、どのような外国人でも

一定の条件を満たせば自由に入出国そして滞在できると定めた憲法に加えて、単純労働者のメキシコへの入国を制限した 1974 年の人口についての法律、そして 2011 年の移民法、そして、それに先立って 2010 年に、1951 年の国連難民条約に基づき制定された難民法がある (Leutert 2018: 3-5)。

1974 年の人口法は、不法滞在を刑事罰としていたほか、中米からの移民に対して一定の条件のもとで入国の許可を与えていたことから、腐敗の温床となっていた。2008 年の改正によって不法滞在は刑事罰からは外され、違反行為となった。

入国者の待遇が大きく変わったのは、2000 年の移民法である。2000 年のサンフェルナンドでの中米移民の虐殺を踏まえて制定されたこの法律では、メキシコに住む外国人の権利が様々な形で明記され、また移民局 (Instituto Nacional de Migración) が、移民政策の実施主体として規定されたほか、人道ビザの制度が導入された。

メキシコの対中米政策は、中米各国における内戦などの混乱そして米国との関係によって規定されてきた。前者については自明だが、後者については説明が必要であろう。1980-90 年代を例にとると、北米自由貿易協定 (NAFTA) への加盟に先立って、米国はグアテマラからの難民キャンプに住む人々の送還を求めた。キャンプが左派ゲリラの滞在場所になっていたというのが理由である。その一方で、南部の各州においてはグアテマラ北部からの農繁期の出稼ぎや経済的なつながりは存在したため、国境の出入りの厳格化には限界があった。そのため、国境を行き来するグアテマラ人のための「ローカルな訪問者のための移民書類 = Formas Migratorias de Visitantes Locales」という名前の短期ビザの制度が残されたのである (Leutert 2018: 7)。

2000 年に就任したフォックス大統領以降、メキシコの大統領たちはこうした移民政策を中米への経済協力と結びつけて提示してきた。200 年のペニャニエト大統領による「南部国境プログラム」は、「メキシコに入国する人々の安全」と「メキシコの南に開かれる入国の場所の安全と繁

栄」を2つの目標としていたが、その一方で、その「安全」を確保するための方策として、移民局の職員の国境付近に配置するなどの実質的な警戒策も取られていたため、その結果として不法移民の拘束は増加し、密入国を試みる人々はより目立たない、危険なルートをとることを強いられた (Leutert 2018: 8-10)。なお、この「南部国境プログラム」にも米国の影響は見られる。2006年のカルデロン政権時代(米国はブッシュ第二期政権)にはすでに、米国とメキシコの間にはメリダ・イニシアティブが結ばれ、麻薬対策のために米国がメキシコに様々な援助を行うというスキームができていたのに加え、2004年ごろからの若者や子供の移民の増加を受け、「南部国境プログラム」開始の直前、オバマ大統領はベニャニエト大統領と電話で会談し、メキシコ南部の国境の問題も麻薬問題の一部であるとして、このプログラムに対して1億ドルの支援を行うこととなった (Leutert 2018: 16-18; ロメロ 2020: 50)。

メキシコの中米移民政策の特徴についての以上の議論をまとめると、ロメロが指摘するように、地域のリーダーとして中米に影響力を持つとする政策であったこと(それが成功したかどうかは別として)、そして米国の影響を強く受けてきたこと(ロメロ 2020: 50)、その2点があげられる。これは後述するロペスオブラドール政権の政策にもあてはまる、メキシコと中米の外交関係の構造的な特徴であるといえるだろう。

(2) 移民キャラバン前史：その起源から2018年3月のキャラバンまで

移民キャラバンの背景にあるのは、中米からの移民にとってメキシコを通過することが大変危険なものだったという事実である。彼らはその過程で麻薬カルテルや腐敗したメキシコの官憲などのターゲットとなり、身代金目的の誘拐にあったり、麻薬組織への協力を求められたりしてきた。前述の法改正のきっかけとなった2000年のサンフェルナンドの虐殺事件は、中米移民の置かれた危険な状況を象徴するものであった⁴⁾。

なお、実は中米からの移民がこれほどの脚光を浴びる以前から、彼らを保護する多くのシェルターが存在し、その多くは移民の通り道、特に

彼らの多くが「利用」する鉄道の沿線にあった⁵⁾。とはいえ、あるシェルターを運営する神父による証言 (Solalinde y Minera 2017a) では、シェルター自体も「中米からの不法移民をかくまう許しがたい存在」として攻撃の対象となっていたことが書かれており、その出版の目的も「いつ自分に何が起こってもわからない」ためであったと、著者自身がメキシコの新聞に掲載された自著紹介の中で述べている (Solalinde y Minera 2017b)。中米からの移民たちにとって、メキシコを通過することはそれほど危険な行為だったのである。

最初のキャラバンは2011年1月、移民たちのイニシャティブではなく、彼らを支援するNGOの活動家らによる抗議行動としてはじまった。前述の人類学者、フランク＝ビターレはある移民を保護するシェルターで調査をしていて、最初のキャラバンに「引き込まれた」(Frank Vitale 2018; Frank-Vitale y Núñez-Chaim 2020: footnote 2.)。このキャラバンには、人権活動家やジャーナリストそして学者たちが参加し、チアパス州のアリアガからオアハカ州のイステペックまでの数百マイルを、数百名の移民たちとともに歩いたという⁶⁾。このキャラバンの活動はその後にも拡大し、2004年にはメキシコ・グアテマラ国境のナランホからメキシコシティに到達し、大統領府の前で「安全な通行」を求めてデモを行った (Petrich 2014)。そして2007年にははじめて、グアテマラから墨米国境まで移動する中米移民を組織化した (Linthicum 2018)。これには数年前から「受難の道」と呼ばれるデモ行進を行い、メキシコ政府の中米移民に対する厳しい扱いに抗議してきたNGO、「国境なきプエブロ (Pueblo Sin Fronteras)」も手を貸した。

2018年春に組織されたキャラバンは、はじめて大々的にメディアの注目を集めた。このキャラバンは、3月25日から26日にかけてメキシコのチアパス州で「結成」されたあと、北上してオアハカ州に入った。そして皮肉にも、2018年4月3日、トランプ米国大統領がキャラバンについてツイートしたことで、広く知られることとなった。女性と子どもを中心とするその一部は、同州のマティアス・ロメロという町で逗留する

ことになった。メキシコの全国紙 *El Sol de México* の記事によれば、この町で彼らは、飲料水の支給や健康を保つための処置を地元自治体から受けると同時に、メキシコの移民管理局 (Instituto Nacional de Migración) から派遣された事務官が、メキシコにとどまる予定の人々には 30 日間、米国に向かう人々については 15 日間の、滞在許可を出すなどの対応をとった (Castillo Santiago 2018)。「国境なきプエブロ」によれば、この時点ではキャラバンは 1200 名程度のグループだったが (Matías 2018)、彼らのうち約 300 名は 4 月の末頃にティファナに到達し、難民申請を待つところまでこぎ着けた (Miroff 2018)。

3 2018 年 10 月の大キャラバンとその後

2018 年 10 月に組織されたキャラバンは、3 月のものと比べても規模の大きいものであった。このキャラバンはどのようにしてはじまり、人々はどのようにして参加を決めたのだろうか。本節ではこの大キャラバンの様子を報告し、参加した人々の動機を探るとともに、なぜその後、大きなキャラバンが発生することがなかったのか、その理由を考察する。

(1) 2018 年 10 月の大キャラバン

ワシントンポストの 2018 年 10 月 23 日付、シーフ記者の記事 (Sieff 2018) は、移民キャラバンの発生の過程やその実態について多くを教えてくれる記事である。それによれば、キャラバンの直接のきっかけを作ったのは、ホンジュラスのジャーナリストであり野党の政治家でもあるバルトロ・フエンテス (Bartolo Fuentes) 氏だった。彼はホンジュラスからの脱出を計画していた人々から、3 月のキャラバンの経験を生かしたい、と問い合わせがあったことを受け、10 月 5 日、自分のフェイスブックに、「キャラバンへの参加を希望する人は 10 月 12 日にサンペドロスーラのバスターミナルに集合すること」という募集を出した。これに呼応して、10 日の夜からバスターミナルに人々が集まり、キャラバンの最初の数日の様子が報道されたことによって、さらに参加人数が増えていった。出

発から数日がたつと、もはや誰もこのキャラバンが「どうはじまったのか」をきちんと説明することはできなくなっていた。そして、これに呼応してエルサルバドルとグアテマラで、他にも3つのキャラバンが発生し、墨米国境を目指すことになった⁷⁾。このようにして、サンペドロスーラから出発したキャラバンに雪だるま式に人々が合流することで、キャラバンは膨らんでいった。

フエンテス氏自身はシーフ記者のインタビューに対し、自分は単に移民を目指す計画をすでに立てていた、いつか移民を決意しただろう、小さなグループが集まるのを助けたただけだ、と言っている。これに対し、駐メキシコホンジュラス大使は、彼をキャラバンの首謀者として名指しで非難し、「ホンジュラスが破綻国家だというデマを流している」と攻撃した。とはいえ、「国境なきプエブロ」のムヒカ氏がいうように、「こんな集団を作り出す (engineer) なんて誰もできない」という方が正確であろう。誰がこれを始めたのか、という問いは、少なくともこのキャラバンにとっては無意味なものであった。

このシーフ記者の記事は他にも、キャラバンに参加した人々のさまざまな声を紹介している。ある女性は10月12日、つい最近のこと開業したトルティーヤ屋にギャングが来て、利益の半分を払わなければ殺すと脅された。ちょうどそのときSNSで「キャラバン」について知り、3時間後には荷物をまとめていたという。(別の資料によれば、男性、特に若い男性の場合は、ギャングに誘われ、仲間に加わらなければ危害を加えると脅されて国を出た、という者もいた⁸⁾。) エルサルバドルでキャラバンのことをテレビで見て、バスのチケットを買い、途中で合流した、という女性もいた。数ヶ月前にホンジュラスを出たものの、メキシコ南部からそれ以上進めずにいたという男性も合流した。ある朝の4時、友人が訪ねてきて「行くぞ」とだけ言われ、30分で支度をしたという16歳の少年もいた。このように、メキシコ最南端・チアパス州のウイシュトラ (Huixtla) で、ワシントン・ポストのシーフ記者によって聞き取られたこれらの証言から、ソーシャルメディアが重要な役割を果たしたこ

と（9月頃からフェイスブックに移民を募るポストが掲示されていた）、それに加えてテレビでもキャラバンのことが報道されており、多くの参加者がそれらに影響を受けたこと、そして彼らの多くが、失うものはなにもないとばかりに、迅速にキャラバンへの参加を決めたことがわかる（Sieff 2018）。

（2） 墨米国境に到着したキャラバン

彼らは11月の半ば頃から、ティファナに到着するようになる。11月11日、最初にティファナについた一団は、キャラバンの中でも差別を受けていたLGBTの亡命申請者であり、続いて数日後には別の300人ほどのグループが到着した（Kinosian and Partlow 2018a; El Colegio de la Frontera del Norte 2018: 35）。

10月19日に最初のキャラバンがメキシコの南の国境についてから、約3週間でメキシコを通過したことになるが、これは徒歩だけでなく、輸送用のトラックや、市民団体や地方自治体が用意したバスなどで移動したからである。11月14日にはティファナ市がスポーツ施設を開放し、2000人を収容できると発表した。ティファナに到着する移民の数は膨れ上がり、11月28日には収容者数は6151名に達した（El Colegio de la Frontera del Norte 2018: 7-8）。移民たちを集めたこの施設には、移民局や保健局などの臨時事務所、さらにはホンジュラスの臨時領事館が設けられ、人道的な滞在許可の発給や医療サービスにあたった。

11月25日には約300人の移民が国境のゲート前でデモを行った。デモが終わろうとする頃に一部の人々が国境を越えようと走り出し、事態は緊迫した。彼らの言い分としては、「不法移民」として米国に入国したあとでも、法律上は亡命申請を行うことができるため、とにかく米国側に入ってしまう、としたわけである。このためゲートは閉鎖され、その上、多くの子どももいたにも関わらず、催涙弾が発射されるなど緊張が高まり、42名が拘束された（El Colegio de la Frontera del Norte 2018: 29-32; Kinosian and Partlow 2018b）。また、米国の対応の遅さに業を煮やして、

メキシコで亡命申請をする人々も出てきた (Olivo 2018)。11 月 29 日には大雨が降り、収容施設が水浸しになったため、収容されていた移民たちの一部は別の施設に移った。しかし、当初入所登録をした約 6000 名のうち、2000 名はすでにいなくなっていた (El Colegio de la Frontera del Norte 2018: 22-29)。

国境に辿り着いたキャラバンの人々は、その後どうなったのだろうか。ティファナについて参考になるのは、北部国境大学院大学の調査グループが 2018 年 11 月 22 日に 1037 人の移民に対して行ったアンケートである (El Colegio de la Frontera del Norte 2018: 9-15)。このアンケートでは、今後どうするのか、と言う質問に対し、彼らのうち 5 割はなんらかの方法で国境を越えることを、約 2 割は難民申請を、目指すと答え、その他、2 割はティファナにとどまる、そして約 6%は「わからない」と答えている (El Colegio de la Frontera del Norte 2018: Fig.3)。また、同じ北部国境大学院大学が組織した、テキサス州イーグルパスと国境を接する、タマウリパス州ピエドラスネグラスでの調査によれば、国境に辿り着いたキャラバンのメンバーは、それぞれの目的や行政からの働きかけ（移動のためのバスの提供など）によって、他の場所から国境越えを試みる人たち、他のメキシコ側の町で仕事を探す人たち、他のメキシコ側の支援施設で待機する人たち、といったように、少しずつ分散していった (El Colegio de la Frontera del Norte 2019: 68-71)。

(3) 「大キャラバン」以降の中米からの移民

2018 年の大キャラバン以降も、キャラバンを組織しようという試みはあった。筆者は 2019 年にもフェイスブック等で「何月何日にサンペドロスーラのバスターミナルに集結せよ」といった文言が出ていることは確認していたが、それらのキャラバンが出発した様子は見られなかった。

新たなキャラバンはなぜ生まれなかったのだろうか。この疑問に答えようとしたのが、2019 年 3 月の CNN の記事である (Alvarez 2019)。アルバレス記者の取材によれば、米国の国土安全保障省は、その時点で

約1万人の中米出身者がメキシコを北上しているが、彼らはキャラバンではなく小さなグループで行動していると推定していた。この記事の中で移民政策インスティテュート（Migration Policy Institute）のシーリー（Andrew Selee）は、キャラバンは安全な移動手段であったものの、キャラバンは米国とメキシコの両政府に監視される存在でもあったため、国境に到着したあと、入国が非常に困難であることが明らかになったのだと分析している。

この国境越えの困難という要因の一方で、メキシコ連邦政府の人道ビザによる対応が功を奏した可能性も指摘されている。メキシコのロペスオブラドール新政権のサンチェス＝コルデーロ内相によれば、同年1月に13500人が中米からメキシコに入国したが、そのうち国境に向かったのは10%で、残りはメキシコに滞在すると決めたという。同時期の別の新聞記事には、この人道ビザについて、「まずはメキシコで滞在許可を得て、そしていずれは米国に行きたい」と話す移民の証言もあるため（Ernst and Semple 2019）、内相によるこの見方がどの程度正しいかは分からないが、この人道ビザの発給は、ロペスオブラドール政権発足当初の移民への融和姿勢を表すものとして、指摘しておきたい。（ただし、このビザの発給は2月に停止されている。）

4 メキシコ政府のキャラバンへの対応

メキシコ政府はどのようにキャラバンに対応したのだろうか。すでに前節でも一部扱ったが、ここではキャラバンがティファアナに着いた直後に誕生したロペスオブラドール政権、そして前任者のペニャニエト政権のキャラバンへの対応をまとめるとともに、バイデン新政権誕生後のキャラバンの再燃に対する各国政府の対応と合わせて、メキシコ政府の果たした役割について議論する。

(1) キャラバンとメキシコ連邦政府（2018年10月時点）

キャラバンに対するメキシコ連邦政府の対応はどのようなものだった

のだろうか。まずは、フェルナンデスデカストロら、カリフォルニア大学サンディエゴ校（University of California at San Diego, 以下 UCSD）の米墨研究センターのチームがまとめた論考（Center for U.S.-Mexican Studies: 2019）に依拠して、メキシコ政府がどのような状況にあり、どんな対応をしたのかを考える。

同センター長のフェルナンデスデカストロらは、キャラバンがメキシコ国内に入った時、ペニャニエト大統領は、ちょうどそのときメキシコを訪れていた米国のポンペオ国務長官とともに、テレビでその様子を見た、という政府高官の証言を引用し、メキシコ連邦政府がキャラバンに対し、単なるオブザーバーであったという立場をよく表すものだ、と述べている。彼らはその要因として、以下の3つを指摘している。第1の要因は、ちょうどこの年に行われた、メキシコの大統領選挙である。7月の選挙で野党候補のロペスオブラドルが勝利し、10月から11月にかけてのキャラバンが通過した時期はちょうど政権交代の端境期で、現職大統領はレームダック化し、また新政権も発足前で、両者ともに積極的な姿勢は打ち出せなかった。第2に、トランプ大統領がキャラバンを「政治問題化」したため、メキシコ連邦政府は独自の政策を打ち出せず、かわりにトランプの要求をかわす方針をとった。そして第3に、これまでの政府関係者による汚職の歴史から、政府がキャラバンのメンバーの信頼を勝ち得なかったことである（Fernández de Castro et al. 2019: 48-50）。

とはいえ、メキシコ連邦政府がこの段階で全くアクションを起こさなかったわけではない。キャラバンの発生当初は、500名の連邦警察の部隊を南部国境に派遣するなどしてキャラバンの入国阻止を試み、またキャラバンの入国後は、彼らに入国登録あるいは難民申請を求めた。そうした試行錯誤ののち、連邦政府はキャラバンの進行を止めるのではなく、連邦警察および海軍がキャラバンの周辺を警護したり、また彼らのメキシコでの滞在をうながすため、一時的なビザを発行し、プライベートセクターに彼らの雇用を呼びかけたりした。また、セロリオが指摘した、サンディエゴ領事館など政府各部門のあいだの調整も、努力の一環

として指摘されるべきであろう (Celorio 2020: 17)。

前述のように、フェルナンデスデカストロらは連邦政府は傍観者に過ぎなかったと書いているが、それでも、キャラバンの進行を認めつつ彼らの安全を守ることに徹した移民局や軍と警察の措置は（あるいはその目的は彼らの監視だったかもしれないが）、状況を考えれば最善の策であったように思われるし、次項で見る自治体レベルでの対応を見ても、キャラバンへの政府の対応はある程度成功していた、あるいは少なくとも、できる範囲で必要なことを（不十分であるかもしれないが）行っていたと、肯定的に評価されて良いように思われる。

(2) キャラバンと地方政府

UCSD チームによるレポートは、通過地となった州政府の一部の対応も取り上げている。たとえばメキシコシティーでは、左派の地方政府が移民寄りの姿勢を打ち出していたことや、市民団体の協力もあり、約 5500 名のキャラバンが市内の運動施設に 11 月 4 日から 10 日まで、1 週間滞在することとなった。メキシコ第 2 の都市グアダハラがあるハリスコ州でも、当初は収容施設が用意され、ボランティアを集めるなど受け入れ態勢を整えたが、キャラバンのメンバーによる麻薬の売買や盗み、そして住民との衝突もあり、州境までバスを提供するので早く国境に向かってくれ、という姿勢へと転換した (Fernández de Castro, et al. 2019: 50-51)。

キャラバンが到着したティファアナでは、バハカリフォルニア州政府は「これは連邦政府の問題だ」として何も動かず、結果的に地元のティファアナ市が、前述の通り収容施設を用意するなどの対応を強いられることになった。その後市長は、移民キャラバンを町の安全を脅かす存在であると発言し、また連邦政府や国際機関に行動を求めた。その後、雨で当初の収容施設が使えなくなったとき、新しい収容施設を用意したのは連邦政府であった。

北部国境大学院大学のピエドラスネグラスでの調査の報告書では、現

地のキャラバンに対してどのような政府機関そして国際的な援助機関が関わったのかを1枚の表にまとめている (El Colegio de la Frontera del Norte 2019: 45)。それによれば、移民局から国家安全保障省 (= 軍) そして警察といった連邦政府機関に始まり、環境安全局 (収容施設の清掃を担当) や福祉局、公共事業局や保健局といった自治体 (市) の機関、そして赤十字や国境なき医師団、国際移民組織 (Organización Internacional para las Migraciones) といった非政府組織、そしてホンジュラス領事館など、キャラバンの受け入れに関わったさまざまな機関が列挙されており、これらの組織による支援の様子も記されている (El Colegio de la Frontera del Norte 2019: 44-52)。また同じ北部国境大学院大学のティファナでの調査の報告書からも、キャラバンの収容所に複数の公共機関が窓口を設けるなど、さまざまな形で移民の支援を行おうとした様子がわかる (El Colegio de la Frontera del Norte 2019: 17-30)。

(3) キャラバン以降：墨米両国の新政権と新型コロナ

2018年12月に大統領に就任したロペスオブラドル (Andrés Manuel López Obrador) は、中米のアメリカ合衆国への移民を考える人々に期待を抱かせるものだった。実際彼は就任当初は、米国に住むメキシコ人との連携とともに、「中米の兄弟」の面倒を見ることを宣言し (ロメロ 2020: 48)、2019年1月には、前述のように人道ビザを発給するなどの措置もとった。移民局の局長に、北部国境大学院大学の学長だったトナティウ・ギジェン (Tonatiuh Guillén) を任命したことも、事情に詳しい人物にこの仕事を任せるという彼の真剣さの表れと考えていいだろう。

しかし、彼の当初の姿勢はトランプ大統領の米国の圧力によって変化していく。トランプ大統領はNAFTAの見直しによる関税の大幅引き上げをちらつかせ、米国に向かう移民の数を減らすための交渉材料にした。最終的にメキシコは拒否したが、米国への難民申請者が、「安全な第三国」としてのメキシコに滞在できるとする案も含め、米国は様々な要求を突きつけた (Reuters 2019)。前述のトナティウ・ギジェンも6月には

早くもその職を辞することとなった (Aristegui Noticias 2019; Verza 2019)。

2020 年 3 月、中米三国では新型コロナウイルスによって人の移動が制限されるようになり、米国に向かうことも困難となった（ただし、米国からの強制送還は続き、新型コロナウイルス拡散に寄与したと見られている：Ernst 2020）。新型コロナウイルスはまた、不法入国者をすぐに国外退去する口実を米国に与えた。それは「タイトル 42」と呼ばれる、伝染病が流行している地域からの入国を制限する規定である。本来であれば中米からの移民はメキシコではなく出身国に送還されるはずだが、この制度の規定によりメキシコに直接「追放」できることになったのである (Miroff 2020)。テキサス州エルパソにある移民シェルター「告知の家」の代表、ルベン・ガルシア氏は、「トランプは壁を作った。その名はタイトル 42 だ。」と述べている (Abi-Habib 2021)。

2021 年 1 月、バイデン新大統領の就任を前に、新政権への期待から再びキャラバンが出発した。しかし、4000 人規模まで膨らんだこのキャラバンはメキシコまで辿り着くこともなく、1 月 19 日（就任式の前日）にグアテマラ国境で解散させられた (BBC 2021a; Sebastian 2021) ⁹⁾。米国の移民キャラバン抑制の最先端は、グアテマラ＝ホンジュラス国境まで南下したのである。

メキシコと米国の関係については 2021 年 3 月、米国政府がメキシコ（とカナダ）に新型コロナウイルスのワクチンが供給すると発表したことにも言及しておきたい。移民対策への見返りか、との質問に対し、米国の報道官は「並行して行われている交渉だ」と述べているが、少なくともこの発表が移民関連の他の交渉のさなかになされたことは、注目すべきであろう (Kitroeff et al. 2021) ¹⁰⁾。これとほぼ同時期の報道では、1 月 25 日から 2 月 16 日までの間にメキシコ政府によって、1200 人（そのうち 300 人が子供）が拘束されたことも報じられており、これと同時にメキシコ南部国境における不法移民の拘束も急激に増加した (Gramlich 2021)。元移民局長のトナティウ・ギジェンは、こうした取り締まりは前例がないと話している (Diaz y Gottesdiener 2021)。

こうしたことから、米国のメキシコや中米諸国への政治的圧力はトランプ政権以後も別の形で継続していて、ロペス＝オブラドル大統領も少なくともある程度は米国の要求を受け入れざるを得なかったものとみられる。

5 考察

本稿ではここまで、キャラバン参加者の動機とメキシコ政府の対応という2つの角度から、キャラバンの生成過程とそれを取り巻く状況を見てきた。本節ではそうした議論をまとめ、キャラバンの政治的な重要性ならびにメキシコ政府の取るべき立場、そして今後の中米移民の動向について考察する。

(1) キャラバンの政治的な重要性

キャラバンという現象が可能になったのは、様々な要因が重なったことだった。背景としてはもちろん、中米の社会不安や暴力の蔓延があり、またホンジュラスに代表される政治腐敗と政府への不信があった(Lissardy 2021)¹¹⁾。その一方で、原形となったメキシコの NGO による、移民たちを伴っての人権活動家など支援者たちの行進に加え、SNS の普及によって人が集まる環境ができたことなどがあげられる。構造的な要因としては、多くの中米人にとって米国は家族や友人が住む場所であることも、重要な背景として付け加えることができるだろう。

こうしてできたキャラバンは、数の力に加え、フランク＝ビターレが指摘するように、可視化されること、注目されることで、安全を確保した。しかし、集団で移動することは政府の監視あるいは管理を容易にし、国境からの難民申請は難航するという側面もある。そのため、少なくとも2018年11月の大キャラバン以降、キャラバンというやり方そのものは下火となり、久々に結成された2021年1月のキャラバンも、グアテマラ国境で解散させられた。しかし、中米の社会的・政治的な不安など、人々が移民を志す要因は現時点ではまだまだ解決されていない。中米の

人々の（必ずしも彼らが望んで起こしたものではない）政治的な戦いは、今後も別の形で続いていくのではないだろうか。

(2) メキシコ政府の役割

移民の送出国から通過国となったメキシコは、どのような役割を担うべきか。2019年と2020年にそれぞれ書かれたデラノ＝アロンソとロメロの論考において、二人はともに、メキシコは米国内の「サンクチュアリ・シティ」にならって、「サンクチュアリ国」となり、中米からの移民を受け入れて保護するような存在になるべきだ、と述べている（Délano Alonso 2019; ロメロ 2020）。彼らの意見に筆者は全く同意するが、彼ら自身も認めているようにその実現は難しいであろう。まず、メキシコという国に彼らを受け入れるだけのリソースがあるかどうか、そして外交的に米国の要求に対し、どの程度独自性を保つことができるかという問題がある。それに加えて、多くの中米の国々の出身者が既に米国に住んでいること（米国に住むホンジュラス人は本国の人口の約一割、エルサルバドル人に至っては五割近くである）を考えると、中米の人々にとって米国は、同じスペイン語が話されているメキシコ以上に身近な国であり、それも彼らが米国を目指す理由となっている以上、メキシコにとどまりたいと考える人々がどの程度いるのかは疑問である。

現在のメキシコ連邦政府の対応を見る限り、メキシコ政府は米国の方針に従わざるを得ないように見える。根本的な問題の解決のためには、山崎（2020）やロメロ（2020）が指摘する通り、中米社会の安定と経済的な発展が必要となろう。しかし、それにはどれだけの時間がかかり、それまでにどれだけの人々が犠牲となるのだろうか。

(3) 中米移民の今後

2021年3月の時点でも、バイデン政権への期待そして2020年に中米を襲ったハリケーンの影響もあり、中米諸国から米国を目指す人々がメキシコの南部国境を通過している（Cuffe 2020; Kitroeff 2020; Abi-Habib

2021a, 2021b)。彼らの多くは、1ドルを払ってゴムの筏でグアテマラから向こう岸のメキシコへと渡る¹²⁾。ワシントンタイムズの記事によれば、国境警備が強化されたといっても、そこに住む人々にとって、国境越えの手助けをするのは「毎日の仕事」なのである (Verza 2021)。

しかしその一方で、ここまで見てきたとおり、米国への入国は難しくなっている。6月8日、彼女にとって最初の海外歴訪となったグアテマラ訪問時の記者会見での、カマラ・ハリス副大統領の“Do not come, do not come.”との発言は、そうした米国の姿勢をはっきりと示すものであった¹³⁾。もちろんこの発言は、移民の要因ともなっている中米諸国の社会的・経済的窮状への援助やコロナウィルスワクチンの提供などの支援と抱合せであるが、そうであったとしても、人々にとって1番望ましい選択肢であるアメリカ合衆国への入国の道は、閉ざされているというのが現状である。

なお、前述のハリス米国副大統領のグアテマラ訪問前後のニューヨーク・タイムズの記事でも、米国の様々な支援（例えばコーヒー農家に対するものなど）の試みが報告されるとともに、「自分は援助の恩恵に浴したことなどない。どこにそんな金が流れているのだろうか」との地元の農家の懐疑的な声や、援助が移民の抑止に効いているというバイデン現大統領の主張に対し、2019年以降、援助額は変わらないのに移民の数は増加しているとのデータが紹介されている (Kitroeff and Shear 2021)。またホンジュラスでは2013年に法制化された「経済雇用特区」の設置計画が最終段階となっている。これは経済特区で様々な特権を認めると同時に、警察機能なども投資家に丸投げするというもので、主権の放棄であるとして2021年5月の時点で猛烈な反対運動が起きている (Proceso Digital 2021)。移民の出発地であり、世界で最も危険な街として知られるサンペドロスーラにも、モールやオフィス街、そして住宅に大学までがセットになったビジネスパークが存在するが¹⁴⁾、こうした試みによって投資を呼び込んでも、それがどの程度ホンジュラスの経済ひいては社会の安定に寄与するのかは疑問である¹⁵⁾。

終わりに

本稿の最後に、2人の政治学者の研究に言及し、キャラバンという行動の政治的重要性について考えてみたい。

メキシコの農村の開発ならびに米国におけるメキシコ系移民の社会について研究する政治学者のジョナサン・フォックスは、米国に移民したメキシコ系移民の故国での政治参加について書かれた、“Exit Followed by Voice”と題された論考（もちろん、ハーシュマン（2005）の Exit-Voice 理論を下じきにしている）の中で、以下のように述べている。

移民というのは、集団行動（collective action）に代わるものである、というのは必然なのだろうか、それとも、それは新しい形の集団行動につながる可能性はあるのだろうか。メキシコ系の移民たちによる様々な形の集団行動を見てみると、「退出（exit）」は「声（voice）」を短期的には代替するとしても「声」が「退出」に続く可能性は十分ある（Fox 2009: 263）。

このフォックスの仮説は、本稿で取り上げたキャラバンとは全く異なる文脈（在外メキシコ人団体の、メキシコ国内政治についての関心）についてのものではあるが、キャラバンはまさにこうした「集団的行動」の重要な事例であり、キャラバンというのは普段は一般に届くことのない彼らの声が、メディアを通じて大きく報道された稀有な事例ではないだろうか。

また、東南アジアの事例を中心に、国家について、そして人々がどう国家に対抗するかについての論考を著してきたジェームズ・スコットは、国家に不満を持つが表立った反抗に出られない人々が、「日常型の抵抗（Everyday forms of resistance）」としての「不服従」という行為によって、時として政府の思惑を無力化することを述べている（スコット 2017: 1-26）。スコットが念頭に置いている「不服従」行為は、あくまでも目立

たない形の抵抗活動であり、その点はキャラバンと大きく異なる（ただ個人としての彼らが匿名性を保つという意味では、キャラバンも目立たない形の抵抗なのかもしれない）。とはいえ、キャラバンは中米の人々にとって、まさにこうした現状を打破するための不服従行為であったことは確かだろう。また、スコットは自身が主催していたイエール大学のアグリアン・スタディーズ・プログラム（Program in Agrarian Studies）のセミナーで、一度ならず「万里の長城は外敵の侵入を防ぐというより、自国民が外に逃げないように建てられたものだ¹⁶⁾」と述べていたが¹⁷⁾、それは2009年の著書 *The Art of Not Being Governed*（邦題『ゾミア』）の主たるテーマである、東南アジアの「丘」に住む人々、つまり平野部の国家の徴税や労役から逃げてそこに暮らすようになった人々につながるものであった。米国という目的地があること、そして逃亡の理由も国家の破綻である点はもちろん大きな違いだが、国家という枠組みを越える人の移動という意味では、このキャラバンという現象はスコットの研究とつながるものに思われる。

今年1月の最後のキャラバンがグアテマラーホンジュラス国境で解散させられたように、米国をはじめとする関係各国の政府はキャラバンへの対処法を「学習」し、新たなキャラバンができないよう対策を立てている。移民を希望する中米の人々にとって見通しは困難であると言わざるを得ない。しかし、キャラバンの指導者でもあったバルトロ・フエンテス氏のフェイスブックによれば、2021年6月現在、彼は野党のリーダーの1人として活動中であり、また、キャラバンに参加したアメリカ人の学生のレポートによれば、キャラバンの内部は民主的な自治のしくみが生まれていたと言う（Rodríguez 2018）。こうした点をもって、キャラバンという現象は、中米の人々にとってのある種の政治的な希望を見せてくれたのだ、という言い方をすることは、あまりに楽観的だろうか。

注

*本稿は「『想像の共同体』 MexAmerica の構築をめぐる米墨の相克」（課題番号 17H04512、研究代表者：早稲田大学山崎眞次名誉教授）ならびに「メキシコ・ユカタン州の先住民村落社会における政治と移民に関する接合的研究」（課題番号 19K12473、研究代表者：渡辺 暁）の2つの科研プロジェクトの成果の一部であり、2021 年前半にある政治学系の査読付き雑誌に投稿し、「掲載不可となった根本的な原因はご論稿と本特集号が求める論文の性格の相違にある（編集委員会からの回答をそのまま引用）」という理由から、掲載不可となったものである（雑誌名も編集委員のお名前も記さないが、掲載をめぐるやり取りにおける丁寧な対応に感謝申し上げる）。筆者自身としては、その論考をなるべく元の形に近い状態で発表したいと考えたため、一部のミスや文章表現を修正し、また字数制限を理由に削った部分をもとに戻し、多少の加筆を行った以外は、2021 年 6 月末の執筆時点から情報をアップデートせず、そのまま発表するものである。

なお本稿は、筆者が以前に書いたレポート（渡辺 2020）を、執筆後に集めた資料と、その後の移民を巡る状況の推移を考慮に入れて大幅にアップデートしたものであるが、その段階からカットした記述も多く、また掲載誌である『ワセダアジアレビュー』第 22 号の編集部と、科研プロジェクトのリーダーの早稲田大学山崎名誉教授のご厚意で、キャラバンを取材した写真家ギジェルモ・アリアス（Guillermo Arias）氏の写真が掲載されている（氏の取材については、Arias [2019] を参照されたい）など、そちらのバージョン独自の情報もあり、そしてまた科研のメンバーの先生方の論考（山崎 2020、前嶋 2020）も読めるので、ご関心のある方は掲載誌をお手に取って頂きたい。

また、本稿と並行して執筆した早稲田科研の成果論文（渡辺 2022 年 4 月刊行予定）にも、本稿の一部と重なる部分があり、そちらには 2021 年 7 月以降（11 月半ば頃まで）の情報や、中米から墨米国境をめざす、より大きな移民の流れについての記述も加わっているため、そちらもご関

心があれば参照されたい。

- 1) 本稿では、ロメロ (2020) にならい、メキシコからアメリカ合衆国との国境を見るという視点から、固有名詞をのぞいて、「米墨戦争」などで知られる一般的な「米墨」という言い方にかえて、「墨米関係」・「墨米国境」という言い方を用いる。
- 2) 著者が参照した主要な動画のタイトルは以下の通りである。(いずれも YouTube にて視聴、最終アクセスは 2022 年 2 月 8 日。)

The Guardian, “On the road with the migrant caravan,” 2018/11/06.

BBC News, “US Border: Migrants risk everything for an American dream,” 2021/03/19.

RT, “Caravan of Dreams: Migrants in US-bound caravans risk everything for a better life,” 2019/07/03.

DW Español, “Apresan al organizador caravana de Honduras,” 2018/10/17.
- 3) ギジェンはもともと北部国境大学院大学の学長で、ロペス＝オブラドル政権発足と同時に移民局の局長に就任したが、その後政府の方針と対立して職を辞した（これについては第 4 節第 3 項で後述）。
- 4) この事件については、Tuckman (2010) を参照のこと。
- 5) 移民たちの多くは「野獣」（スペイン語で La bestia）と呼ばれる貨物列車の屋根に乗り、北を目指した。これについては多くのルポルタージュが存在する他、キャリアー・フクナガ監督の映画、*Sin nombre*（『無名の人々』：日本公開時の邦題は『闇の列車・光の旅』）でも取り上げられている。
- 6) フランク＝ビターレはその後のキャラバンにも同行し、それが少しずつ拡大していく様子を見てきた (Frank-Vitale 2018a)。彼女は自身の経験を、*Fortune* 誌のような一般のメディアでも発信している (Frank-Vitale 2018b)。
- 7) なお、2018 年 3 月まで 3 回にわたってキャラバンを組織してきた「国境なきプエブロ」は、同年春のキャラバンのあまりの規模の拡大

と反響の大きさに、今後はキャラバンの組織には関わらないとの決定を下していたが、10月に再度キャラバンが組織されることになる、彼らを「手伝う」ことに決め、グアテマラ・メキシコ国境から彼らに同行した。

- 8) その1例として、以下の動画をあげておく。RT Documentary, “Moving Migrants: Meet activists who launched the migrant caravan marching toward the United States,” 2019/09/20, YouTube.com, 18’30”-19’00” (最終アクセスは2022年2月8日)。
- 9) なおこのSebastian 記者によるAP通信の記事には、グアテマラの外相が、ホンジュラス政府に「何も対策をしていなかった」こと、そして「多くの移民が暴力的な方法でグアテマラに入国してきた」ことに驚いている、との記述があった。移民対策をめぐる国際協力の難しさをうかがわせるエピソードと言えるだろう。
- 10) その後グアテマラに対しても、同様のワクチンの提供が発表された (BBC 2021b)。
- 11) 一例をあげれば、ホンジュラスのエルナンデス大統領の弟は、米国で麻薬密輸の罪で終身刑に服している。
- 12) RT, “Moving Migrants,” 9’48”-10’20”。
- 13) なお、民主党のオカシオコルテス議員らは、難民申請は合法的な入国手段であり、しかも中米の混乱を招いた責任は米国にもあるなどとして、この発言を批判している (Oladipo 2021)。
- 14) Altia Smart City ホームページ (<https://altiasmartcity.com/>、最終アクセス2021年6月30日)。このホームページでは、生活環境のよさや安全性、そして英語スペイン語のバイリンガルの働き手が多いことが強調されている。米国市場向けのコールセンターの設置などが想定されているものと考えられる。
- 15) 本稿ではほとんど触れることができなかったが、ホンジュラスの抱える政治的・社会的問題については、Chayes (2017) や Villacorta y De Gori (2018)、Romero(2019) などの文献を参照されたい。また、中米

に関する日本語で読める文献として、以下のものをあげておきたい。ジャーナリストの工藤律子による『マラス・暴力に支配される少年たち』は、マラスというギャングをテーマに据えてはいるが、むしろギャングに参加してしまった／せざるを得なかった若者たちの声を聞き取った労作であり、桜井三枝子と中原篤史が編集した『ホンジュラスを知るための60章』も、編者の二人に加え、田中高や望月博文といった現地をよく知る研究者が原稿を寄せた重要な本であり、筆者も、渡辺（2020）において移民の背景を書くときに、大いに参考にさせていただいた。また、桜井の『グローバル化時代を生きるマヤの人々』は、その後半で2章を割いて中米からアメリカ合衆国への移民について触れており、特に第8章では中米からアメリカ合衆国への移民の政治的な要因についてもふれている。中米の事情に詳しくない筆者は、これらの本から多くを学んだことを感謝とともに付記しておく。

- 16) これは元々歴史家の Owen Lattimore が提唱したものだが (Scott 2013)、近年この説は考古学的にも支持されている模様である (AFP 2020)。
- 17) 筆者は 2003 年 9 月から 06 年 3 月までイェール大学に在籍し、2005 年 9 月から 06 年 3 月までプログラムアシスタントをつとめるなど、同プログラムに大変お世話になった。

参考文献

- Abi-Habib, Maria. 2021a. "On Mexico's Border with U.S. Desperation as Migrant Traffic Piles Up," *New York Times*, March 14 (Updated March 21).
- . 2021b. "Images of Confusion, Then Anguish: Migrant Families Deported by Surprise," *New York Times*, March 19.
- Alvarez, Priscilla. 2019. "What Happened to the Migrant Caravans?" CNN, March 4.

- Arias, Guillermo. 2019. "Telling the Story as It Is," AFP, <https://correspondent.afp.com/telling-story-it>.
- Aristegui Noticias. 2019. "Renuncia Tonatiuh Guillén al Instituto Nacional de Migración," Aristegui Noticias (<https://aristeginoticias.com>), 15 de junio.
- BBC. 2021a. "Migrant Caravan: Guatemala Blocks Thousands Bound for US," BBC, 18 January.
- . 2021b. "Kamala Harris Tells Guatemala Migrants: 'Do Not Come to US'," June 8.
- Bissonnette, Andréanne and Élisabeth Vallet, eds. 2021. *Borders and Border Walls: In-Security, Symbolism, Vulnerabilities*, Oxon and New York: Routledge.
- Castillo Santiago, Víctor. 2018. "Llega a Matías Romero caravana "Viacrucis Migrante 2018": no le tememos a Trump," *El Sol de México*, 3 de abril.
- Celorio, Marcela. 2020. "The Calibaja Border, the Gateway to a Cross-Border Reality," *California Western International Law Journal*, 50 (1), pp.1-22.
- Center for U.S.-Mexican Studies, University of California at San Diego. 2019. *The Migrant Caravan: From Honduras to Tijuana: An analysis by the Center for U.S.-Mexican Studies Fellows*, La Jolla: Center for U.S.-Mexican Studies, UCSD.
- Chayes, Sarah. 2017. *When Corruption is the Operating System: The Case of Honduras*. Carnegie Endowment for International Peace (www.jstor.org/stable/resrep26902).
- Cohn, D'Vera, Jeffrey S. Passel and Ana Gonzalez-Barrera. 2017. "Rise in U.S. Immigrants From El Salvador, Guatemala and Honduras Outpaces Growth from Elsewhere," Pew Research Center, December 7.
- Cuffe, Sandra. 2020. "Honduran Migrants Are Caught between Economic Despair and Militarized Crackdowns," *Los Angeles Times*, October 3.
- Délano Alonso, Alexandra. 2019. "México como país santuario," *Nexos*, 1 de febrero.

- Diaz, Lizbeth, and Laura Gottesdiener. 2021. "Immigration Raids Sweep Mexico as Central American Exit Grows under Biden," Reuters, March 16.
- El Colegio de la Frontera del Norte. 2018. "La caravana centroamericana de migrantes en Tijuana, 2018: Diagnóstico y propuestas de acción," El Colegio de la Frontera del Norte.
- . 2019. "La caravana centroamericana de migrantes en Piedras Negras, Coahuila 2019: Diagnóstico y propuestas de acción," El Colegio de la Frontera del Norte.
- Ernst, Jeff. 2020. "How Coronavirus Has Halted Central American Migration to the US," *The Guardian*, Apr. 2.
- Ernst, Jeff, and Kirk Semple. 2019. "Mexico Moves to Encourage Caravan Migrants to Stay and Work," *New York Times*, Jan. 25.
- Fernández de Castro, Rafael, Savitri Arvey, and Guillermo Yrizar Barbosa. 2019. "The Mexican Government's Reaction to the Migrant Caravan," in *The Migrant Caravan: From Honduras to Tijuana, an analysis by the Center for U.S.-Mexican Studies Fellows*, edited by UCSD Center for U.S.-Mexican Studies, pp.48-53.
- Flores, Adolfo. 2018. "A Huge Caravan of Central Americans Is Headed For The US, And No One In Mexico Dares To Stop Them," BuzzFeed, March 30.
- Fox, Jonathan A. 2009. "Exit Followed by Voice: Mapping Mexico's Emerging Migrant Civil Society," in Carmen Diana Deere and Frederick S. Royce eds., *Rural Social Movements in Latin America: Organizing for Sustainable Livelihoods*, Gainesville: University Press of Florida, pp.263-292.
- Frank-Vitale, Amelia. 2018a. "From Caravan to Exodus, from Migration to Movement," NACLA, November 20 (<https://nacla.org/news/2018/11/26/caravan-exodus-migration-movement>).
- . 2018b. "I Live in Honduras, Where People Are in Constant Fear of Being Murdered. It's No Wonder They Join Caravans," *Fortune*, November 23.

- Frank-Vitale, Amelia y Margarita Núñez-Chaim. 2020. ““Lady Frijoles”: las caravanas centroamericanas y el poder de la hipervisibilidad de la migración indocumentada,” *EntreDiversidades. Revista de Ciencias Sociales y Humanidades*, 14, pp.37-61.
- Gramlich, John. 2021. “Migrant Apprehensions at U.S.-Mexico Border Are Surging Again,” Pew Research Center, March 15.
- Kinosian, Sarah and Joshua Partlow. 2018a. “LGBT Asylum Seekers Are First to Reach the U.S. Border from the Caravan. Now They Wait,” *Washington Post*, Nov. 14.
- . 2018b “U.S. Closes Major Crossing as Caravan Migrants Mass at Border in Mexico,” *Washington Post*, Nov. 26.
- Kitroeff, Natalie. 2020. “2 Hurricanes Devastated Central America. Will the Ruin Spur a Migration Wave?” *New York Times*, Dec. 4.
- Kitroeff, Natalie, Maria Abi-Habib, Zolan Kanno-Youngs and Jim Tankersley. 2021. “U.S. to Send Millions of Vaccine Doses to Mexico and Canada,” *New York Times*, March 18.
- Kitroeff, Natalie and Michael D. Shear. 2021. “U.S. Aid to Central America Hasn’t Slowed Migration. Can Kamala Harris?” *New York Times*, June 6 (Updated June 23).
- Leutert, Stephanie. 2018. “The Impact of Securitization on Central American Migrants: A report by the Policy Research Project on Mexico’s Migratory Policy,” Lyndon B. Johnson School of Public Affairs Policy Research Project Report, University of Texas at Austin.
- Linthicum, Kate. 2018. “Pueblo Sin Fronteras Uses Caravans to Shine Light on the Plight of Migrants: But Has That Backfired?” *Los Angeles Times*, December 6.
- Lissardy, Gerardo. 2021. “Qué significa para el presidente de Honduras que hayan condenado a su hermano en EE. UU. a cadena perpetua por narcotráfico (y por qué supone un “desafío” para la Casa Blanca),” BBC

News Mundo, 30 de marzo.

Matías, Pedro. 2018. “La Caravana de Migrantes es un éxito “gracias a Trump”: Pueblos Sin Fronteras,” *Proceso*, 4 abril, 2018.

Miroff, Nick. 2018. “At the U.S. Border, a Diminished Migrant Caravan Readies for an Unwelcoming Reception,” *Washington Post*, April 28.

———. 2020. “Under Coronavirus Immigration Measures, U.S. is Expelling Border-Crossers to Mexico in an Average of 96 Minutes,” *Washington Post*, March 31.

Oladipo, Gloria. 2021. “AOC Condemns Kamala Harris for Telling Guatemalan Migrants not to Come to US,” *The Guardian*, June 9.

Olivo, Antonio. 2018. “Daunted by U.S. Border, Some Caravan Migrants Seek Asylum in Mexico — for Now,” *Washington Post*, November 30.

Petrich, Blanche. 2014. “Piden indocumentados centroamericanos garantías de tránsito libre en ruta a EU,” *La Jornada*, 24 de abril (<https://www.jornada.com.mx/2014/04/24/politica/019n1pol>).

Proceso Digital. 2021. “Sectores alzan la voz contra las ZEDEs en Honduras,” Proceso Digital (<https://proceso.hn/>) 24 de mayo.

Reuters. 2019. “Mexico Won’t Be Safe Third Country for Asylum Seekers: Ebrard,” Reuters, September 10.

Rodriguez, Jesús A. 2018. “How the Migrant Caravan Built Its Own Democracy,” *Politico* (<https://www.politico.com/>), December 12.

Romero, Ramón, ed. 2019. *Antología Del Pensamiento Hondureño Contemporáneo*. CLACSO (JSTOR, www.jstor.org/stable/j.ctvnp0kc9).

RT Documentary. “Moving Migrants: Meet Activists Who Launched the Migrant Caravan Marching toward the United States,” YouTube.com, 18’30”-19’00”.

Scott, James C. 2009. *The Art of Not Being Governed: An Anarchist History of Upland Southeast Asia*, New Haven: Yale University Press (邦訳:『ゾミア——脱国家の世界史』みすず書房、2013年)。

- . 2012. *Two Cheers for Anarchism: Six Easy Pieces on Autonomy, Dignity, and Meaningful Work and Play*, Princeton: Princeton University Press (邦訳:『実践 日々のアナキズム——世界に抗う土着の秩序の作り方』岩波書店、2017年)。
- . 2013. “James Scott on the topic of “The Art of Not Being Governed”,” University of New England YouTube channel.
- Sebastian, Sandra. 2021. “Guatemala Troops, Police Break up Caravan of Weary Migrants,” Associated Press, January 19.
- Shirk, David A. 2021. “The Escalation of US-Mexico Border Enforcement,” in Bissonnette, Andréanne and Élisabeth Vallet, eds., *Borders and Border Walls: In-Security, Symbolism, Vulnerabilities*, Oxon and New York: Routledge, pp.27-48.
- Sieff, Kevin. 2018. “How the Migrant Caravan Became So Big and Why It’s Continuing to Grow,” *Washington Post*, Oct. 23.
- Solalinde Guerra, Alejandro y Ana Luz Minera Castillo. 2017a. *Solalinde: Los migrantes del sur*, Barcelona: Los libros del Lince.
- Solalinde, Alejandro y Ana Luz Minera. 2017b. “Solalinde: los migrantes del sur,” *La Jornada*, 25 de noviembre.
- Tuckman, Jo. 2010. “Survivor Tells of Escape from Mexican Massacre in which 72 Were Left Dead,” *The Guardian*, Aug. 26.
- Verza, María. 2019. “Mexico Migration Chief Resigns, Prisons Director Tapped,” AP, June 15, 2019 (<https://apnews.com/article/9eb378d91fcc4c3fb36f5606665ad82c>).
- Verza, María. 2021. “Business as usual: Thousands cross Mexico’s southern border,” *Washington Post*, March 27.
- Villacorta, Carmen Elena and Esteban De Gori, eds. 2018. *Golpe Electoral y Crisis Política En Honduras*. CLACSO. (JSTOR, www.jstor.org/stable/j.ctvnp0kf8).
- Walker, Margath A. 2021. “Securitizing Insecurity along Mexico’s Borders,”

in Bissonnette, Andréanne and Élisabeth Vallet, eds., *Borders and Border Walls: In-Security, Symbolism, Vulnerabilities*, Oxon and New York: Routledge, pp.185-198.

日本語文献

石井由香 2018「序論 移民・難民をめぐるグローバル・ポリティクス」『国際政治』第 190 号、pp.1-16。

木村秀雄 2007「愚直なエスノグラフィー」『文化人類学』第 72 巻 3 号、pp.383-401。

工藤律子 2016『マラス・暴力に支配される少年たち』集英社。

桜井三枝子『グローバル化時代を生きるマヤの人々』明石書店、2010 年。

桜井三枝子・中原篤史（編著）『ホンジュラスを知るための 60 章』明石書店、2014 年。

ハーシュマン、A. O. 2005 年『離脱・発言・忠誠—企業・組織・国家における衰退への反応』ミネルヴァ書房。

前嶋和弘 2020「トランプ政権の移民政策—ヒスパニック系移民に対する対応を中心として—」『ワセダアジアレビュー』第 22 号、pp. 70-75。

三澤健宏 2019「メキシコ・中米との関係を通して見る米国の移民政策」『統計』2019 年 1 月号、pp.9-16。

山崎眞次「メキシコ政府の新移民政策」『教養諸学研究（早稲田大学）』141、pp. 87-109、2016 年。

——— 2020「移民キャラバンに対するメキシコ政府の対応」『ワセダアジアレビュー』第 22 号、pp. 65-70。

ロメロ・イサミ「メキシコと中米からみた墨米国境問題」『歴史学研究』第 995 号、2020 年 4 月、pp.45-53。

渡辺 暁「移民キャラバン—その背景と参加する人々の論理—」『ワセダアジアレビュー』第 22 号、2020 年、pp.57-65。

——— 「墨米国境を目指す人々—メキシコ・中米・ダリエンギャップ—」山崎眞次編『北米における移民コミュニティの形成とその特質：

MexAmerica の構造を中心に』第 6 章、東信堂、2022 年 4 月刊行予定。

AFP. 2020.「万里の長城の北方区間、侵略防ぐ目的ではなかった」AFP、6 月 9 日。